



終末論



第 32 章 死後状態と死人の復活

32. 1. 人間の肉体は死後、ちりに帰り朽ち果てるが（創 3:19、使徒 13:36）霊魂（決して死にもせず眠りもせず）は、不滅の存在だから、それを与えられた神に直ちに帰ります（ルカ 23:43、伝道書 12:7）。義人の霊魂は聖なる者として完全になり、極めて高い天に受け入れられ、そこで光と栄光のうちに神の御顔を仰ぎ見、彼らの体の全き贖いを待ちます（ヘブル 12:23、II コリント 5:1, 6, 8, ピリピ 1:23、使徒 3:21、エペソ 4:10）。悪人の霊魂は地獄に投げ込まれ、大いなる日の審判の時まで閉じ込められ、そこで苦痛と徹底的暗黒のうちにあり続ける（ルカ 16:23, 24、使徒 1:25、ユダ 6, 7、I ペテロ 3:19）。聖書は、体と分離された霊魂の行く所として、この二つの場所以外に、他のどんな所も認めません。

一項の説明は、ローマカトリック教会の煉獄教理と、幼児リンボー教理を反対することです。再洗礼派は、霊魂睡眠説を主張するが、これもまた誤りです。死後の霊魂は、キリストが再び来られるまで、認識が停止状態にいると主張するのも誤りで、現代福音主義者たちの中でジョン・ストート (John Stoen, 1921-2011) と同じく、霊魂消滅説を語る者たちがいるが、これもやはり誤りです。

32. 2. 終りの日まで生存している者は、死を味わわずに変えられて（I テサロニケ 4:17、I コリント 15:51, 52）、死人はみな以前と同一な体をもって復活するでしょう。まして、異なった性質を持ってではあるが、彼らの霊魂と再び永久的に結合されます（ヨブ 19:26-27、I コリント 15:42-44）。

32. 3. 不義なる者たちの体は、キリストの力によって復活して恥辱を受けるでしょう。義なる者たちの体はキリストの霊によって復活して栄光に至り、キリストご自身の栄光ある体に従うことになるでしょう（使徒 24:15、ヨハネ 5:28, 29、I コリント 15:43、ピリピ 3:21）。

3 項から、ウェストミンスター総会員たちが反対していた誤り等を確認して見ることができます。総会員たちは、ローマカトリックの終りの日の審判において、最終的に義と認められるという 2 重的義認論を反対しました。またアルミニウス主義者は、義認の状態から落ちることもありうると主張し、義と認められることは、終りの日の審判で完成されると主張するが、誤りです。今日、パウロの新しい視点が言う、終りの日に、行為の良し悪しに従って義と認められるという主張も、やはり誤りです。終りの日の審判は、ただ慰めと立証 (vindication) です。